

五味川純平著作集

第18卷

戦争と人間
(7)

五味川純平著作集

第18卷



戦争と人間 (7)

三一書房

五味川純平著作集 第18卷（全20卷／第7回配本）
戦争と人間(7)

一九八四年一月三十一日 第一版第一刷発行

定価 三五〇〇円

著者 五味川純平 ©一九八四年

発行者 菊地喜三次

発行所 株式会社三一書房

〒101 東京都千代田区神田駿河台二の九

☎03(291)3131

振替東京9—84160

印刷 北京印刷一廠（本文組版）

晚印刷株式会社（本文印刷）

東洋美術印刷株式会社（扉・函印刷）

製本 東京美術紙工 製函 高田紙器

装丁 熊谷博人

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

Printed in Japan

五味川純平著作集 第十八卷

戦争と人間

裁かれる魂

第一部

その冬は、例年のように氷が張りつめることがなかった。凍っても日中に直ぐ溶けた。寒さにまろくなつて歩かねばならぬようなことは、新京以南ではめつたになかった。

そうはいっても、やはり、冬である。溶けた氷は、陽脚の短い部分から、じやりじやりしはじめて、足許をしみるような冷さで濡らした。いっそ凍ってしまう方が凌ぎよいかもしれない。

邦が俊介の帰還を知ってから、かなりの日数がたっていた。邦には世間が急に狭くなった。俊介との再会が怖ろしいのである。そのくせ、口が渴ききつてしまうような熱い憧れがあった。

雷太とのあの理不尽なむごたらしい出来事さえなければ！

邦は、俊介がどこかへ転勤になることを祈っていた。それも、しかし、内地へ帰ってしまうことには耐えられそうもなかった。ハルビンか奉天か大連か、ともかく地続きのどこかにいてほしかった。

俊介が海の向うへ去ってしまうことは、邦の生活状態からは、会うことの不可能を意味するようであった。

俊介の転勤の噂は、父の口からも聞かなかつた。俊介はこの街にいるのだ。いつか、彼は、邦の勤め先へ田島を訪ねて来るかもしれない。

そう思うと、邦は罪人のような不安に襲われるのだ。怯えている自分かうとましくもある。だが、どう気を持ち換えようとしても、俊介を意識するかぎり、どうにもならないのである。

怖れてばかりいないで、いっそのこと早く会えるように自分から動いてみて、ボロ屑のように打ちのめされるものなら、そうなってしまふ方がいいかもしれない。

そうではない。隠せるものなら、隠し通したかった。恥辱を知られるのは、死ぬよりつらい。知られて、そのために失うのは、人生のほとんどすべてのような気がする。

俊介はいっかな現われようとしなかった。

邦は、自分がもう俊介にとっては過去の人間になってしまったのかもしれないと思った。

父親にそれとなく伍代産業の社内の様子をきいても、父親は自分のうだつが上らぬことの不満をこぼすばかりで、俊介が何をしようとしているかなどは、わからなかった。

雨の日に新調の靴を抱いて裸足で歩いていた少女に傘をさしかけてくれた青年は、もうそんなことは忘れてしまったのだ。

俊介は邦のことを忘れてはいなかった。思い浮べることは、むしろ、頻繁であった。ただ、そのことがどれだけの意味を持つかが、はっきりしなかった。彼の心を頻繁に訪れるのは邦だけではないからである。

休憩時間に同僚たちと球戯をしているときでも、仕事の合間でも、俊介は狩野^{かの}温子^{あつこ}の視線を繰り返し空想した。温子はもう死んだのだ。だが、俊介のなかではまざまざと生きていた。

黒い、潤みのある、暖い、柔らかな眸がじっと見守っている。

あなたは鋼のように逞しくおなりになったわ。――

そう云う声さえ聞えそうな気がする。

お宅の新築披露の晩、私のために泣いてくださった、あのやさしい少年があなただとはとても思えないくらい……かつての少年は涙ぐむのを覚える。

温子が殺されたときその場に合せなかったことを、もう何百べん悔んだかしれない。い合せたら、彼は温子を守って鬼神のように荒れ狂ったろう。そして、いっしょに死んだだろう。あるいは、ホロンバイルの曠野で生き残ったように、温子を助けて生き残ったかもしれない。

彼は、しかし、もう、温子と別れたときの彼ではない。

温子の俤の飽きることのない訪れを享けながら、苦を抱くこともできたのだ。

その苦とは、別れも告げずに離れて来た。

除隊して来たら、大柄な体つきがどことなく苦を感じさせる小谷京子が、満洲勤務を希望して東京から来ていた。渡満の理由は、京子はあからさまには語らなかったが、東京で英介の秘書をしているのに耐えられないことがあったらしかった。

この京子が、ときおり、俊介をじつと見つめている。俊介の除隊を計算して渡満したとは思えないが、まんざら知らない仲ではない。東京での淡い触れ合いが、何百日かの後に、何百里か隔ったところで、さながらそうなる運命であつたかのような味わいを持ちかねない。

俊介は、しかし、京子からの視線を意識すると、きまって邦を想い浮べた。邦は、俊介の心のなかで、小谷京子の対極にいるようであつた。深い意味があるわけではなく、体つきから受ける感じがそうさせるのかもしれない。

その日は雲が降っていた。いつもなら社員はあらかた屋外に出て球戯を楽しんだり日向ぼっこをしたりする昼の休みに、みんなはしょうことなしに屋内に留って、雑談を交した。

俊介は、机の上で将棋を指しているのを、見ていた。

近くでだれかが云っていた。

「……理研コンツェルンが整理に入らなきゃならんて、ほんとかね」

「らしいね」

だれかが答えた。

「興銀が整理案を斡旋するんだろう」

「……一業一社主義は駄目なのか」

別のが云った。

「そうじゃないね」

もう一人が受けた。

「時局と巨大財閥の挟み討ちだよ」

「……というと？」

「国際事情が険しくなつて資材の入手が困難になつたろ。そこへもつて来て、生産拡充の重点主義だね。理研は、理研に限らんが、日曹だって、森だって、歴史が浅いからね、重点主義を強行されたら、資材の入手難で泣かなきゃならん……」

「三井や三菱が時局乗りで化学工業に進出して来たからね」

「それもあるが、致命傷は、理研には金融機関がないってことだよ」

「そう云やあ、わが社だって銀行はないよ」

声がぶつくり切れた。そこから、視線が束になって俊介の方へ送られた。

もつともだ。

俊介は聞えなかったふりをした。

傘下会社六十社の理研コンツェルンが、もし整理に入らなければならないとしたら、伍代の社員たちが気にするのも当然のことである。

「わが社は大丈夫だよ」

一人が勢いよく云った。

「満洲伍代は創業以来軍の信頼の蓄積がある。それに、東京でジュニアが専務になったのだって、時局を考えての人事だろう。まさかのときには、どんな手だつて打てるさ、銀行なんか無くたつて」

みんながまた俊介の方を見た。反応を期待してのことである。

俊介は将棋から眼を離れたが、直ぐに戻した。盤面では、優勢な方が兵力の展開集中を終って、まさに敵陣を突破しようとしていた。

話は横でつづいている。

「……繊維工業会社が重化学工業へ進出したのも重点主義を喰って、合併統合の必要に迫られてるらしいね。東洋紡なんか……」

俊介は、東京で兄の英介がどんな動き方をしているか、父の由介との間にどんな密議が凝らされているか、自分の眼で確かめたいような気がしながら、将棋の進行を見守っていた。

「……兵役が改正になると、どうなるんかなア」

と、別の声が聞えた。

「……後備役がなくなつて、予備後備を通して予備役十五年四ヵ月にするってことは、いいおっさんになつても兵隊に取られるってことだもんな」

「……補充兵の教育召集も百八十日に延長されるんだろ」

「満洲の召集も内地並みになるんかなア」

予備役兵長の俊介には、今後何年、あるいは何ヵ月の娑婆の生活が許されていることか。

大地が叫喚する砲声、鼻を衝く硝煙と屍臭、眼の眩むような疲労……白い粉を吹く汗、欲求不満の男たちのねじくれた生活……

彼にはもう時間があまりないのかもしれないのかもしれない。漫然と日を過ごしていることに苛立ちを覚える。彼は生きてき

た印を何も残していないのだ。天上から火を盗んで地上にもたらしたプロメテウスにあやかろうとした少年の日の夢ともいべき絵さえも、まだ中途半端のままである。――

机の上では、勝負がついた。敗けた方は、陣地を蹂躪されて、王が裸になっていた。

「やりませんか」

勝った方が云った。

俊介は敗けた方と席を換った。

勝負がはじまった。

俊介は、駒を進めはじめたとき、ふと、柘植のことを思い浮べた。柘植がどこかで部隊を指揮する姿を想像したのである。俊介が、いつか、どこかで、柘植の部隊に所属する運命が、待っていないとも限らない。

将棋は、相手の仕掛けで、急戦になった。

柘植はどこかへ行ってしまった。プロメテウスも消えてしまった。

近くで笑い声が起るまで、俊介は勝負に没頭していた。笑い声は、ひどく耳障りであった。だれかが何やら云っていた。それにつれて、笑いが起伏した。

俊介は自分の手番を指して、話を聞いた。

「……慰安所では土地のクローニャンを使うのかね」

「そりゃいろいろだよ。後方から連れて来る場合もあるし、現地調達もあるし……」

「最前線では？」

「前線にはそんなものは置けないね」

「じゃ、どうする？ 困るだろ」

「あんたなら、どうする？」

笑いが渦を巻いた。

「戦線は、しかし、こうやって地方にいるより自由がきくんじゃないのか」

「そりゃあな、その気になればだが、人によりけりだ」

「あんた、やった口だろ？」

「どうだかね」

「どうだった？　いうこと、きくか？」

「そりゃきくさ。こっちは戦勝国の軍隊だ。もっともね、小人数で遠出をして物色したりすると、ふん捕まっってひどい目に合うこともあるが」

「しかし、手を出したら、クーニャン、ぎゃーぎゃー騒いで、人に知られずってわけに行かんだろう」

「知られたってかまわんさ。そこは、武士は相見互だよ」

また、どっと笑い声が沸いた。

俊介は聞き流して、まだ考えこんでいる相手の指し手を読もうとした。

そのときに、ぼそぼそと小さな声が聞えた。

「汚くてやりきれませんね、クーニャンは」

おとなしい、日ごろめったに口もきかない男が、そう口を挟んだのである。

身分はまだ職員にならない准職員だが、齢はもう三十にはなっていよう。小柄で、妻子のある男で、いつもおずおずとしたような表情を浮べていて、同僚たちと遊び歩くことなど皆無といってよい。

「……汚いって、何が……？」

一人が、意外な飛び入りに驚いて、間を置いて、きき返した。

「……クーニャンの前が垢で汚れてるんです。肌は白いんですがね、それが風色に見えるほど……」

「よく観察しやがった」

だれかが混ぜ返して、大笑いになった。

「……こっちだって汗まみれの垢まみれだろ」

「……そりゃそうですけど……」

「気になるかね」

「気分をそがれますね」

「だが押えつけてやってしまった。それとも、二番手、三番手だったか……」

笑い声が破裂して、直ぐに消えて、男たちの口もとに残った。

俊介は、将棋の相手に無言で会釈して、席を立った。唐突であった。

「……あんた、戦地で人を殺した？」

小柄な男は、俊介の射すくめるような視線の前でどぎまぎした。

「……いいえ」

「人を殺すより、罪が軽いってわけか」

人びとは、いままで話の圈外にあった俊介の突然の云い方に含まれている憎悪の響きをいぶかった。

俊介は云い捨てたまま、部屋を出て行った。

大きな声も出せそうもない男が、戦地では他国の女を犯すことが出来て、帰って来れば、依然として、おとなしい男、善良な夫、やさしい父親として存続し得る。それが戦争というものである。それは、しかし、戦場で悪鬼のように荒れ狂って多勢の人間を殺した俊介が、帰って来て、おとなしい、平和主義者らしい顔をしていることに較べれば、罪は軽いのかもしれないのだ。

俊介は会社を出て、雲のあがったびちゃびちゃした道を繁華街の方へまっしぐらに歩いた。まるで火急の用が行先に待っているもののようにであった。

急用は彼の外にはなかった。早くから思っているくせに、根本的な治療も養生も怠って、大して面白くもない生活の惰性に溺れている病人のように、急用は彼自身のなかにしかなかった。